服飾文化学会誌〈作品編〉 Vol.6 No.1 47～55（2013）

舞台衣裳にみるオートクチュールドレスの構造
―ニナ・リッチのアシンメトリーベアトップドレス―

砂長谷 由 香・小 橋 宏 美

Structure of Haute Couture Dress as Observed in a Stage Costume
― A study of an asymmetric strapless Nina Ricci dress ―

Yuka Sunahase・Hiromi Kobashi

Abstract

Among the many haute couture costumes in the Bunka Gakuen Costume Museum, an asymmetric strapless Nina Ricci dress, once worn by stage actress Koshiji Fubuki, was chosen for the purpose of clarifying the sewing, pattern and construction of the dress. The following methods were used: photography, drawing and measurement of the actual costume.For the pattern, a three-dimensional form based on actual measurements was made, fabric similar to the original used, and the representation and original were then compared. The results: we were able to clarify the relationship between the sewing, pattern and construction of the dress. These results can be used as research data and educational material for students in the costume field. As the Tsubouchi Memorial Theatre Museum at Waseda University possesses similar theatrical costumes, this research can be used for exhibition descriptions as well as study material for both museums.

Key Words：オートクチュール（haute couture）／ 舞台衣裳（stage costume）／
ニナ・リッチ（Nina Ricci）／ パターン（pattern）／ 縫製方法（sewing method）

1．緒言

オートクチュール仕立ての衣裳研究では，装飾技法やシルエットなどデザインに関する研究が中心であり，また，舞台衣裳の研究においても舞台の内容と衣裳デザインの関係などの研究が行われており，研究成果から衣裳のデザインについての流行や舞台衣裳のデザイン意図については多く明らかにされている．

しかし，それら衣裳の外観的なデザインについての研究は行われているが，衣裳の構造・パターン・縫製についての研究は少なくその詳細は把握出来ていない．

本研究は，1951 ～ 1980年に舞台女優として活躍した越路吹雪の舞台衣裳の中から，ニナ・リッチのアシンメトリーベアトップドレスを研究対象の衣裳とし，衣裳を外側から観察・採寸調査するだけでなく衣裳の構造を探るべく，内側からも詳細に調査した上で衣裳の制作意図を明らかにする．又，調査結果を基に同様の縫製方法で衣裳の再現を行い，再現制作した衣裳と所蔵衣裳とを比較研究する．このことから，衣裳調査の整合性を立証し，その衣裳の構造及びパターンと縫製について明確にすることを目的とする．

本研究において資料とする衣裳は貴重資料である為，本来であれば詳細な調査をすることは出来ないが，今回は，研究成果を同様の舞台衣裳を所蔵する早稲田大学坪内博士演劇博物館並びに文化学園服飾博物館の展示解説・研究資料とし，更には服飾分野について学ぶ学生の為の教育並びに研究資料としていかすものであることから，本学園服飾博物館にご協力頂いた．

2．越路吹雪とは

越路吹雪（1924 ～ 1980）は，1937年に宝塚音楽歌劇学校に入り，1939年歌劇団デビューし主演男役として活躍し，退団後も女優・シャンソン歌手として活躍する．特に1953年からの「リサイタル」は，毎回の興行が恒例化するほど人気であり，チケットの入手も困難なほどであったと言われている．越路は，リサイタルで着用した衣裳には大変こだわりを持ち，その多く

文化学園大学

はニナ・リッチとイヴ・サン・ローランのオートクチュール仕立てのドレスを着用していたことが著書にも記されている[注1)].

3．実物衣裳資料

本研究で研究対象とする衣裳は図1に示す通り「越路吹雪着用の舞台衣裳，ニナ・リッチ製アシンメトリーベアトップドレス」（文化学園服飾博物館所蔵）である．衣裳は，1979年9月日生劇場で行われたロングリサイタルイタルで越路吹雪が着用（図2）のものであり，越路吹雪氏の夫君 内藤法美氏より越路吹雪他界後に文化女子大学（現 文化学園大学）紫友会に寄贈された後，文化学園服飾博物館に移管されたものである．また，衣裳は図3に示す通りニナ・リッチの1979／80年秋冬オートクチュール作品であり，衣裳のデザインは，アシンメトリーのベアトップドレスで，上半身にはよこ方向に数本のドレープ，スカートには左脇ウエスト部分からのドレープと腰に共布のリボン装飾が施されている．以下実物衣裳資料をオリジナル衣裳と呼ぶ．

前面　　後面　　側面

図1　ニナ・リッチ製アシンメトリードレス
文化学園服飾博物館所蔵

3－1　オリジナル衣裳の布地調査

オリジナル衣裳の布地調査方法は，オリジナル衣裳布地を破損させない方法である厚さ計測，織組織，組成の調査とした．調査結果を表1に示す．組成は，ドレス表地・ファウンデーション布地共にシルク100％である．

表1　所蔵衣裳の布地の緒元

	表地	ファウンデーション布地
厚さ（mm）	0.447	0.353
織組織	綾織り	平織り
素材名	サテン	タフタ
組成	シルク	シルク

図2　越路吹雪ドレス着用写真[注2)]
（ロングリサイタル '79.9日生劇場に於て）

図3　1979/80年秋冬
オートクチュール作品[注3)]

3－2　オリジナル衣裳の構造調査

オリジナル衣裳の内部構造調査は，オリジナル衣裳を直接観察し，写真撮影及びスケッチすることにより情報収集した．オリジナル衣裳の構造及び縫製調査結果を図4に示す．身頃は，デザインの特徴であるドレープの繋がりを考慮した右脇あきであり，前後身頃は一続きとなっている．あきは，左あきが一般的なあき位置であるが，左腰にリボン装飾があることから，それらのデザインを崩さない為に右あきになっていると考えられる．また，ドレープ奥の陰ひだで上中下3枚に切り替えた構成であり，このことは，ドレープを作る際布地がよじれたりせず無理なく美しく表現出来るようにする為であると考えられる．身頃表地の内側には，ドレスの土台となるファウンデーションが別仕立てされた上で縫い付けられていた．スカートは，裏地無しの一重仕立てであり，前中心・後ろ中心でたて地を通すことで，左脇ウエスト部分からのドレープは

布目がバイアスとなり，バイアス布目の特性をいかして柔らかな表情のドレープを作り出していることが分かる．

3－3　オリジナル衣裳の縫製調査

3－3－1　ファウンデーションの縫製方法

図4に示す通り，土台のファウンデーションは，前身頃が3面構成，後ろ身頃が2面構成の全身で計5面構成であり，ミシン縫合した縫い代は割り，裁ち端を1.3cmに揃え，幅0.2cm×送り16針／3cmピッチのジグザグミシン縫いで始末されている．また縫い代部分には，1cm幅の綿テープが縫い代側から縫い付けられており，0.6cm幅のプラスチック製平ボーンが縫い代と綿テープの間に入れられている．たての切り替え線上［前後中心，左脇（右脇はファスナーあきの為ボーンは無い），前身頃プリンセスライン］にボーンを入れることで，土台のファウンデーションとして身体にフィットさせることが出来，更にはドレスを安定させて着用出来る効果が上がると考えられる．オリジナル衣裳の土台ファウンデーションの縫製方法を表2に示す．

3－3－2　ドレスの縫製方法

図4に示す通り，ドレスの身頃にはドレープがあり，身頃ドレープの影ひだ山がファウンデーションに（手縫いにより）星止めで止め付けられている．着脱の為のあきは，右脇あきであり，スカートのヒップライン辺りまで（手縫いによる）星止め縫いでファスナーが付けられている．ドレープの影ひだを土台のファウンデーションに止め付けることで崩れることがなくドレープの表情を安定させることが出来ると考えられる．

スカート脇縫いは，ミシン縫合であり，縫い代は2cm幅で手縫いにより裁ち目かがりが施されている．

表2　オリジナル衣裳（ファウンデーション）の部位別縫い方一覧

No.	部位	縫い方	針目数
①	ウエストダーツ	ミシン縫合、脇側へ片返し	13針／30mm
②	センターダーツ	ミシン縫合、下側へ片返し	13針／30mm
③	プリンセスライン	ミシン縫合縫い割る 裁ち端ジグザグミシン 縫い目中央に綿テープ（10mm幅※）＋ボーン（6mm幅）	13針／30mm 16針／30mm 13針／30mm
④	前後中心、左脇	ミシン縫合縫い割る 裁ち端ジグザグミシン 縫い目中央に綿テープ（10mm幅※）＋ボーン（6mm幅）	13針／30mm 16針／30mm 13針／30mm
⑤	見返しとの縫合	手縫い、普通まつり	6mmピッチ

表3　オリジナル衣裳（ドレス）の部位別縫い方一覧

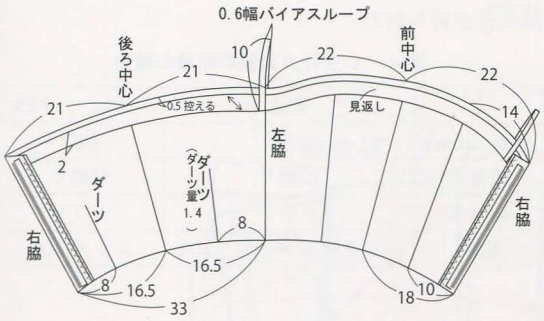
No.	部位	縫い方	針目数
⑥	ドレープ影ひだ	土台ファウンデーションに星止め	
⑦	見返しの縫合	手縫い、身頃より6mm控えて普通まつり	9mmピッチ
⑧	前後中心線、左脇線	ミシン縫合縫い割る	13針／30mm
		裁ち端ジグザグミシン	16針／30mm
		縫い目中央に綿テープ＋ボーン	13針／30mm
⑨	ウエスト部の縫合	ミシン縫合	13針／30mm
		（身頃＋スカート＋土台ファウンデーション＋バイアス裁ちオーガンジー）	オーガンジー 1.5cm幅
⑩	ウエストベルト付け	50mm +25mm幅のグログランリボンを	
		ウエスト縫い代に星止めで付ける	7mmピッチ
⑪	ファスナー付け	手縫い、星止め、芯に15mm幅綿オーガンジーを一緒に縫合	7mmピッチ
		縫い代裁ち端をファウンデーションに千鳥がけ	6m 幅×7m ピッチ
		ファスナーテープを縫い代に普通まつり	9mmピッチ
⑫	スカート右脇縫い	ミシン縫合縫い割る	13針／30mm
			16針／30mm
⑬	スカート左脇縫い	ミシン縫合縫い割り18～20mm、裁ち端は手かがり	13針／30mm
⑭	スリットあき	完全三つ折り8mm幅、くけ縫い	8mmピッチ
⑮	スリット角錘	錘の大きさ直径25mmの円	
⑯	裾	裏側に芯（バイアス裁ち平織り綿オーガンジー）	
		裁ち端手かがり、3mm内側に奥まつり	
⑰	リボン	内側全面に芯として綿オーガンジーを入れている	
		リボン内側中央で中縫い、縫い代6mm幅	13針／30mm

図4　オリジナル衣裳構造及び縫製調査

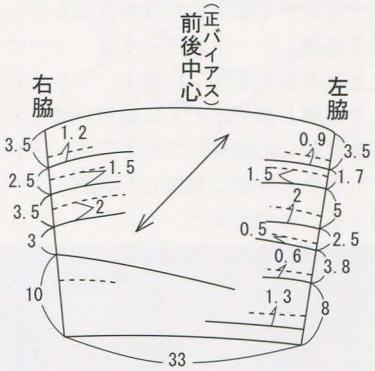
裾のスリット部分は，1cm幅の完全三つ折り縫いによる始末であり，着用の際スリット部分の裏側が見えても良い仕立てになっていると考えられる．また裾の角に直径4.5cmの錘が入れられており，着用時に裾さばきが良くなるよう仕立てられている．

身頃とスカートの縫合は，ファウンデーションと共に3枚一緒に縫合され身頃側へ片返しされている．また，ウエスト部分には裏側からグログランリボンのベルトが付けられており着用時に内ベルトとしてとめることで安定して着用出来るよう配慮されている．オリ

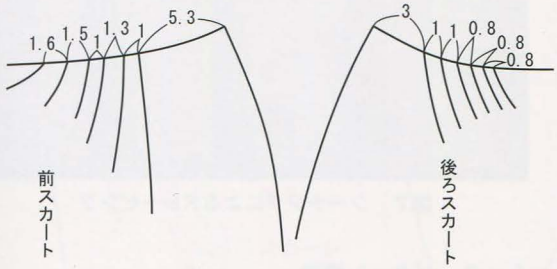
(cm)



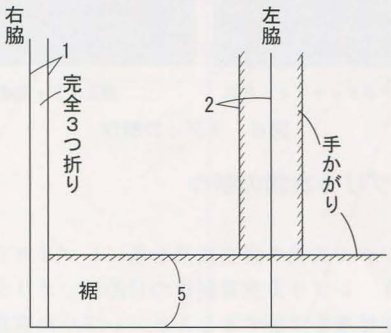
ファウンデーション出来上がり寸法



身頃ドレープ位置



スカートウエストタック位置



スリットの仕上がり寸法

図5　オリジナル衣裳採寸調査

ジナル衣裳（ドレス）の縫製方法を表3に示す．

3－4　オリジナル衣裳の採寸調査

採寸は，テープメジャーと竹尺によりオリジナル衣裳を損傷させないよう配慮して行った．採寸箇所は，着丈や周囲長だけでなくドレープの幅や陰ひだ等パターン作製に必要と思われる箇所とする．実物衣裳の採寸結果を図5に示す．

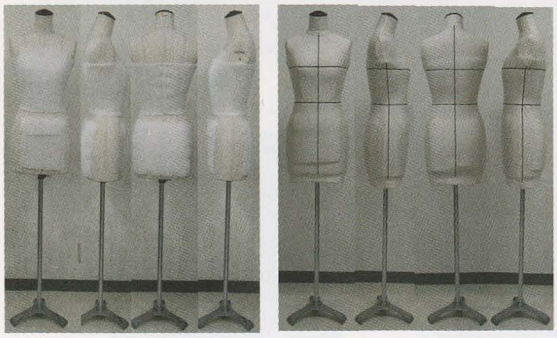
実物衣裳の着丈は約120cmであり，前後身頃脇寸法は22.5cm，ウエスト寸法は前後身頃各33cmが出来上がり寸法であった．装飾のリボンは，最大幅が21cm，リボン片側の出来上がり長さは34cmである．

ファウンデーションは，2cm幅のバイアス裁ちした見返しがトップ部分に付けられている．また身頃のドレープは，脇部分で0.6cm～2.0cmの奥行きがあり，1.7cm～5.0cm間隔に配置されていた．スカート右脇

には，裾から約68cmのスリットが入っていた．

4．補正ボディの制作

オリジナル衣裳の正常な着用状態を調査し，またレプリカを作製する為，着用時に使用するボディを制作した．制作するボディは，既製のボディ（文化ヌードボディ６号バスト84cm，ウエスト60cm，ヒップ90cm）を補正して制作することとし，オリジナル衣裳寸法よりもやや小さめサイズを選定した．選定した既製ボディにオリジナル衣裳を着用させ，オリジナル衣裳と既製ボディの空隙部分にドミット芯を巻き，更に２WAYストレッチ素材で外側を覆い補正することで，安定して着用できる補正ボディを制作した．以下このボディを「補正ボディ」と呼ぶ（図６）．



文化ヌードボディ＋ドミット芯　　補正ボディ完成

図６　ボディの制作

5．レプリカ衣裳の制作

オリジナル衣裳の調査結果を基にレプリカ衣裳の制作を行う．レプリカ衣裳制作の目的は，オリジナル衣裳の調査結果を立証することと，レプリカ衣裳により今後服飾を研究・学ぶ際の標本として容易に手に取り観察することが出来る資料とすることを目的とする．

5－1　レプリカ衣裳用布地の選定

レプリカ衣裳の制作において，布地の選定は大変重要な要素であり，特に今回の衣裳デザインのようにドレープが施されているデザインは布地の特性によりその表情は大きく左右される．そこで，オリジナル衣裳の使用布地物性結果を考慮して現在市販されている布地の中からレプリカ衣裳制作の布地選定を行った．選定した布地の緒元を表４に示す．選定した布地は，色合い，風合い，織組織でオリジナル衣裳の使用布地と類似性が得られた．

表４　レプリカ衣裳の布地の緒元

	表地	ファウンデーション布地
厚さ（mm）	0.32	0.22
織組織	綾織り	平織り
素材名	サテン	タフタ
組成	シルク60% キュプラ40%	シルク100%

5－2　ドレーピング

オリジナル衣裳の採寸値を参考に，補正ボディを用いてドレーピング手法により立体再現を行った．使用布地は厚手湯通しシーチングとする．シーチングによるドレーピング結果を図７に示す．ドレーピングにより再現した衣裳と補正ボディに着用させたオリジナル衣裳写真を比較した結果，シルエット・ドレープ形状ともにオリジナル衣裳に類似した状態でシーチングにより再現することが出来た．

図７　シーチングによるドレーピング

5－3　パターン採取

ドレーピングにより立体表現したシーチングを平面展開し，パターン採取を行った．パターン採取した結果を図８に示す．図８－１に身頃パターン示す．赤線はドレス身頃パターン，緑線はファウンデーション，黒線は補正ボディ寸法の成人女子用文化式原型である．パターン形状を把握し易くする為，採取したパターンと文化式原型の前後中心線及びバストラインを重合した．身頃は，デザインの特徴であるドレープの繋がりを考慮した右脇あきであり，左脇で前後身頃が一続きとなっている．また，ドレープ奥の陰ひだで上下３枚に切り替えた構成である．

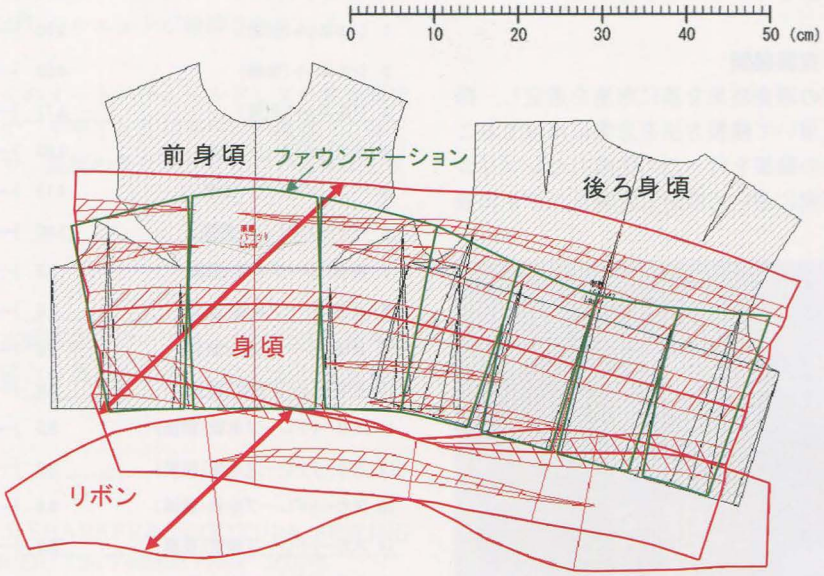


図８－１　身頃パターン

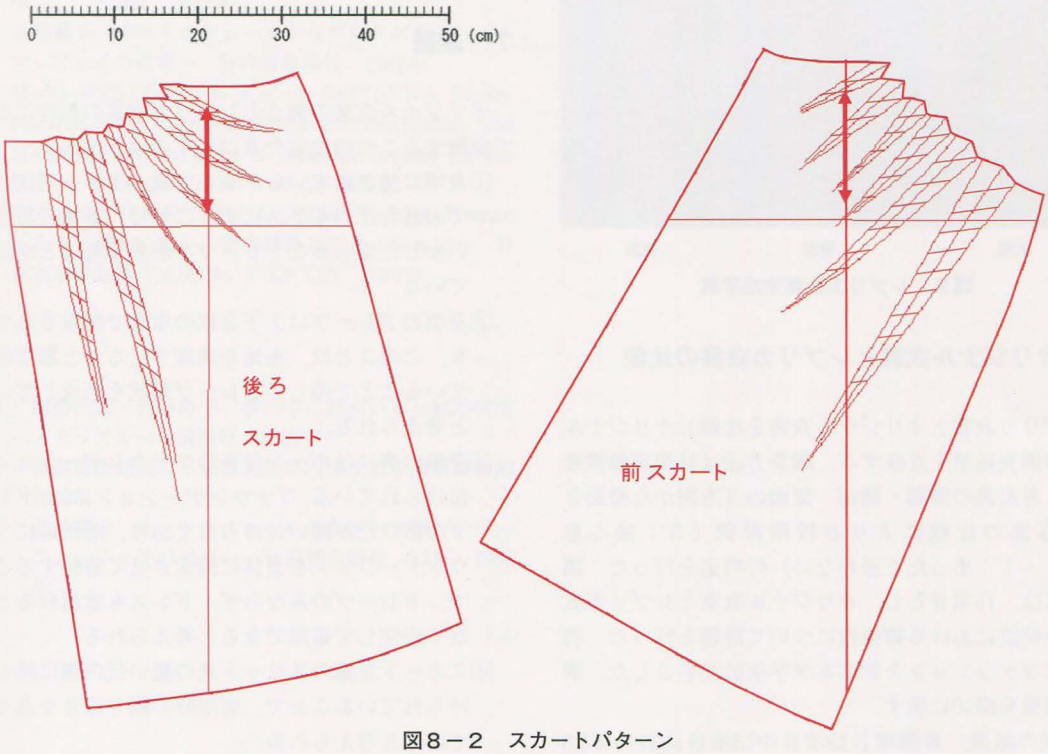


図８－２　スカートパターン

図８－２にスカートパターンを示す．スカートの前後中心はたて布目であり，左脇ウエスト部分からのドレープ布目はバイアス布目である．この様な布目の設定によりバイアス布目の特性をいかして柔らかな表情

のドレープを作り出していることが分かる.

5－4 レプリカ衣裳縫製

オリジナル衣裳の調査結果を基に布地を選定し，採取したパターンを用いて縫製方法を忠実に再現することでレプリカ衣裳の縫製を行った．完成したレプリカ衣裳は，今回の研究において設定した補正ボディに着装させた（図9）.

前面　後面　側面

図9 レプリカ衣裳完成写真

6．オリジナル衣裳とレプリカ衣裳の比較

レプリカ衣裳とオリジナル衣裳を比較しオリジナル衣裳の調査結果を立証する．調査方法は目視官能検査とし，各衣裳の前面・側面・後面の３方向から撮影された写真の比較により５段階評価（５：強く思う・・・１：まったく思わない）の判定を行った．調査項目は，15項目とし，オリジナル衣裳とレプリカ衣裳の各部位における類似性について評価を行った．判定者はファッションを学ぶ本学学生計30名とした．調査の結果を図10に示す.

調査の結果，質問項目15項目中13項目において3.5以上の評価を得ることが出来，オリジナル衣裳の調査結果が立証された.

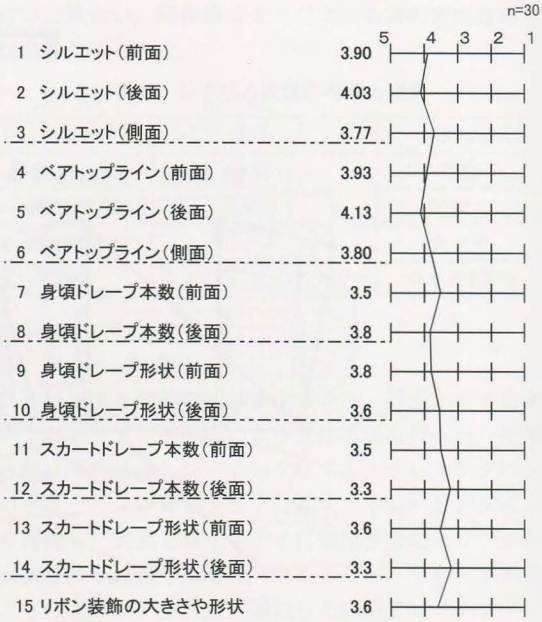


図10 目視官能検査結果

7．結語

オリジナル衣裳の調査とレプリカ衣裳の制作において認識することの出来た点は以下の通りである.

①身頃に施されているドレープは，ドレープに対して布目を正バイアスにすることで，布地の特性をいかした柔らかなドレープを形成することが出来ている.

②身頃のドレープは上下３枚の布地で構成されており，このことは，布地を無理させることなく用いていることで美しいドレープ形状を形成していると考えられる.

③身頃の裏にはボーン付きのファウンデーションが付けられている．ファウンデーションには，ドレープの陰ひだが縫い付けられており，着用時にファウンデーションを身体に固定させて着装することで，ドレープのみならず，ドレスも着崩れることなく安定して着用できると考えられる.

④スカート左脇のスリット角の縫い代内側に錘が付けられていることで，着用時の裾さばきを良くしていると考えられる.

⑤ファスナーあき，ウエスト縫合部分にはオーガンジー素材が芯代わりに使用され，縫い目の補強を行っている.

⑥裾の縫い代内側にオーガンジーを入れることで，裾が程よく広がりシルエットが維持されている．

今後，数多くのオートクチュールドレスの調査研究を進めることで，デザインとパターンの関係（立体と平面の関係）や，縫製のテクニックについて解明していきたい．

謝辞

オリジナル衣裳調査においては，文化学園服飾博物館に多大なご協力を頂きました．ここに記して謝意を表します．

参考文献

○ CLAIRE B.SHAEFFER「COUTURE SEWING TECHNIQUES」The Taunton Press　2007年
○ 倉みゆき・能澤慧子　西洋服装史実物資料のレプリカ制作―解体と模写―服飾文化学会＜作品編＞ Vol.5 No. 1　1-10頁　2012年
○ 目島嘉子　オートクチュールからプレタポルテへ―ニナ・リッチの世界―　竹内書店新社　1981年
○ Maria NESTEROVA ,Ksenia SPITSYNA Japan-Inspired Style European Haute Couture:History and Modernity Special Issue of Japanese Society for the Science of Design Vol.19- 4 No.76 2012年
○ 佐々井啓　19世紀イギリスの演劇 The New Woman にみる「新しい女」―その精神とファッション―　日本家政学会誌 Vol.58 No. 1 23-33頁　2007年

引用文献

注1）越路吹雪・岩谷時子　夢の中に君がいる―越路吹雪メモリアル―　講談社　1999年
注2）演劇博物館82　早稲田大学坪内博士記念演劇博物館 2000年
注3）目島嘉子　オートクチュールからプレタポルテへ―ニナ・リッチの世界―　竹内書店新社　11頁　1981年